

# 色々おかしな暗殺者

綿月レオン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

暗殺業界最高を誇る影月家

その長の息子の影月レオン。

そのレオンがISを動かした事により始まるバカみたいな物語。

コメディありシリアスありのドタバタ物語である。

注意！

○この物語は酷く原作が崩壊する危険があります。

○原作重視の人やアンチなどはブラウザバックして下さい。

○後これ二次創作なんで文句は受け付けません

# 目次

レオンVS化物  
幕間・自宅帰還

89 82

キャラ設定

1

## 第一章

始まりの時来たれり

8

展開速いがIS学園入学

15

金髪さんとセフィロスさん

21

痴女撃退ノ法

32

金髪嬢VS暗殺者

41

サッカー程楽しいものは無い

51

中国娘登場ノ乱

59

激闘？侵入者？

68

セフィロスVS鉄巨人

76



# キヤラ設定

影月レオン

裏社会で超有名な影月の養子

男で高身長

しかしIS学園で裏社会を知る者は更識家くらいしかない。

元はドイツの実験体で、男でもISを動かせるかどうかの実験に使われたが、その時に影月の刺客がドイツの研究者を暗殺、そしてレオンを回収し養子にした。両親曰く「子供が出来ないから欲しかったし実験体で生きてる人貴方しか居なかった」だそう。影月家は暗殺の家系であり、その暗殺の腕は北のお偉いさんを5秒で20回殺せるくらいだそう。組織は特に組んでおらず殆ど単騎でやるそう。だが、レオンの場合は特殊で、中学生の時にやりあった友達を入れて組織を組んでる。組織の名をそれぞれこう言うらしい

○十機神

○Undertale

○ビースト

この三組織で動く。レオンはその三組織を束ねる総帥という訳だ。

レオンの職務は普段は表向きなのだ。代表候補生の指導や軍の指導、ISの開発などをしていく。そして暗殺などは組織が動くためレオン自らつてのがあまりない。しかし総帥な為暗殺技術は最高。

レオンのIS

カオス

赤黒をベースとしたFFのカオスみたいな色をした外観で、手には爪らしきブレードがある。主に暗殺向きではないため、力でねじ伏せる時しか使わない

装備

装備には一つ一つに技が無数にある。

名刀ムラマサ

長さ約3mの長刀。一回斬撃するとその斬撃が100回になるという相当強い代物。

○贖罪

光の速さをも超えるような速さで八回斬り、そのままなぎ払い相手を飛ばすという技。

王の財宝（ゲートオブバビロン）

無数の武器を射出して敵を攻撃する。自分の意思で射出する所を変える事が出来る。

## ○神罰

相手の周囲から王の財宝を放ちまくり、最後に相手の頭上から天地乖離す開闢の星を放つ。

アスカロン

現時点最強の遠距離ライフル。放つ弾はレーザーであり、そのサイズは大砲レベル。

○誕生のときたれり、其は全てを修める者

溜めて撃ち込む極太レーザー砲。その威力は建物がまるでプリンみたいに倒壊していく……

ワンオフ・アビリティー

渴望を開け、我が無慈悲な女神よ

この技は自分の寿命を引き換えに放つ危険な技。しかし威力はIS学園を消し炭に出来る強さである。しかし使ったら本人が3日は寝込む程ハイリスクなものだ。

## 十機神

レオンが中学の時に起きた闘争、「秩沌戦争」の時に混沌側の幹部10人を見事撃破し

引き抜いた部隊。それぞれに固有能力があり、担当する所も違う。

○ガーランド

全身鎧の男。固有能力は大剣変型。担当は陽動部隊。性格は口の悪いおじいちゃん

○皇帝

金ピカの英雄王もどきの人。固有能力は速攻罨作り。担当は外交長。性格は上から目線だが優しい一面もある。

○暗闇の雲

刺激的な服を着てる女の人。固有能力は波動砲。担当は内務長。性格はおばあちゃん的な存在。

○ゴルベーズ

黒い鎧に身を包まれた男。固有能力は魔術。担当は偵察隊長。性格は皆のお兄さん。

○エクステス

薄緑の鎧の人。固有能力は無の力。担当は技術長。性格は刺激的な人。

○ケフカ

ピエロの服装をしている人。固有能力は変則魔法。担当はテロ隊長。性格はイカレてる人。

○セフィロス

銀髪のイケメン男。固有能力は剣術。担当は参謀総長。性格はクール

○アルティミシア

ちよっとしたドレスを着てる女の人。固有能力は時操作。担当は狙撃総長。性格はぱつとしない人。

○クジャ

へそ出し男の子。固有能力は破壊魔法。担当は潜入捜査隊長。性格はナルシスト

○ジエクト

筋肉モリモリマッチョマン。固有能力は異常筋力。担当は兵士育成。性格はお父さん的な存在

Undertale

レオンが中学二年の時に迷い込んだ地下世界で出会ったモンスター達。全員硬い絆で結ばれてる。

○トリエル

ヤギの人型モンスター。炎系の魔法を得意とする。皆のお母さんの役です。

○パピルス

スケルトンのモンスター。骨を飛ばして攻撃する。性格はアホの子。

○アンダイン

魚人のモンスター。槍を飛ばして攻撃する。性格は豪快な性格。

○メタトン

高性能自立型AI。爆弾などを使って攻撃する。パフォーマーとして居る。

○アズゴア

Undertaleの団長。槍と炎の合わせ技が得意。性格は温厚

○サンズ

Undertale副団長。ブラスターや重力を使う。性格はジョーク好きだが怒ると怖い。

ビースト

レオンと戦ったビースト。通称人類悪とも呼ばれてる存在。数は少ないが皆強過ぎるので、滅多に出ることは無い。

○ティアマト

皆が知っているティアマトさん。いつもは小さい状態で居るわけですが、戦闘状態になるとケイオスタイドを発動させ最終決戦の形態となる。このティアマトは喋れる。もう凄くお喋り。

○ゲーティア

皆さん大好きゲーティアさん。いつもは人王styleですが、戦闘状態は魔神王styleになります。いつもレオンの部屋でゲームしてます。もうそれはそれは廃人レベルに。

サーヴァント

基本FGOのサーヴァントは全員居ますが大半はレオンの家か自分で家を作っているかしてる。レオンにいつも付いてきてる人も居るためカオスである。

## 第一章

### 始まりの時来たれり

レオン side

科学者A 「こんな完全体見た事がない！」

科学者B 「これを使えば世界の頂点に！」

科学者C 「他の実験体を即座に破棄しろ！」

「「「こんな使える道具は今まで見た事ない!!!」」」

レオン 「……夢か」

俺の名は影月レオン。元ドイツの実験体で現在は影月家の養子だ。今居るのは自分の家のベット。両親は仕事で海外に行っている。影月家とは暗殺の家系であり、両親は凄腕の暗殺者である。俺も役に立つ為に仲間を集め組織を組んだ。まあ毎日が騒がしいんだがな。

レオン 「…飯食って今日の予定考えよ。」

俺は部屋から出て階段を降りる……するとリビングからなんか声が聞こえる。

サンズ「今日は良い天気だ……」

パピルス「そうだな！サンズ！」

アンダイン「今日は訓練日和だ！ンガアア！」

……朝から元気だな……俺はドアを開けてリビングに入る。

レオン「よう、お前ら。朝から元気だなおい。」

サンズ「まあな……大半はパピルスとアンダインだけだな。」

この小さいスケルトンはサンズ。Under taleの副団長をしている。実力は相当強いが面倒くさがりな性格でほぼ何もしない。好物はケチャップ。ワンパック飲み干すスケルトンってこいつくらいしか居ないんじゃないか？

パピルス「ニエヘヘ！朝は気持ちのいいものだぞ！レオン！」

レオン「あいにく俺は朝苦手なんだよ。」

こいつはパピルス。サンズと兄弟なのだ。サンズが兄で、パピルスが弟らしい。パピルスはUnder taleの組織に入っているが、虫も殺せないようなやつで、正直暗殺ではなく人と接する仕事をさせればいいんじゃないかと俺は思う。

アンダイン「レオン！後で手合わせ願おう！」

レオン「槍の訓練か？受けて立とう。」

こいつはアンダイン。魚人のモンスターでヒーローみたいな役回りだ。ヒーローと

言う役に相応してか槍術は達人級に強い。俺が修行を付けてる為もつと強い。

レオン「さて……飯食うぞお前ら」

3人「「おう！」」

そんなこんなで、俺ら4人は朝飯を食う事にした……

サンズ「なあレオン、テレビ付けるぞ」

レオン「構わんよ。」

俺はサンズに聞かれた事を朝のトーストをかじりながら言った。

サンズ「ありがとさん。」

そしてサンズはテレビを付ける。するとニュースが映る……その内容は……

アンダイン「IS初男性操縦者出現だア？」

アンダインがそう言う。確かに見ればニュースはその事で独占されてる。

レオン「織斑一夏……あのブリュンヒルデの弟か。」

サンズ「へえ………たいした野郎だな。」

サンズが皮肉そうに言う。まあネームバリューだよなこういうのって。

パピルス「確かレオンもIS動かせるよな?」

レオン「その通りだパピルス。まあ公表される事なんてないだろうね。」

元ドイツの実験体のせいか、俺は生まれつきISを動かせる体だ。知ってる人は俺の父である影月陽炎。そして影月家のISの会社、フェニックスの社長であり俺の母親である、影月涼子と、俺が率いる組織の皆しか知らない。護身用と仕事用に2つの専用機を持っている。仕事用は滅多に使わんけどな。するとニュースから

アナウンサー「さらに臨時ニュースです! 影月涼子さんから二人目の男性操縦者、影月レオンが居ることが判明しました! 証拠映像もあります!」

俺ら4人は盛大にお茶を吹いた。

涼子 side

涼子「さて、レオンにもそろそろ人とのコミュニケーション能力を高めてもらわな  
いとね。」

私がレオンの事を公表したのには理由がある。それはレオンの性格を変えるためだ。  
レオンは基本人間には興味を示さない。理由はただ一つ。「面白くない」からだ。まあ  
面白い人間には色々世話を焼くみたいなんだけどね。例えば……つと、これはまだ  
言っではいけないね。楽しみがなくなってしまう。

涼子「さて……今日は来るでしょうね……レオン」

まああんな風に宣伝してしまったのだから普通は来るだろう。そう思っているとドア  
のノックが聞こえた。

涼子「ええ、開いてるから入って来なさい。」

ドアを開けた人物は予想通りの人だった。

レオン side

俺は今うちの会社、フェニックスの社長室の前に居る。あの人は本当に自由だから父さんが居ないとストッパーが居なくなるから本当に面倒なんだよ！そして俺は社長室のドアをノックする

涼子「ええ、開いてるから入って来なさい。」

俺は社長室のドアを開ける。

レオン「何してんすか母さん!？」

涼子「え？楽しそうじゃない。」

レオン「楽しそうじゃないですよ!？」

なんでよりによって今のタイミングなんだよ!？きつきだってインタビューの人達が多過ぎてやばかったんだよ！

レオン「公表した目的はなんだよ？」

涼子「IS学園に入ってもらうため」

レオン「俺は女子じゃないよ!？」

なんであんな女の花園へ行かないといけないんだ？

涼子「楽しそうだしね…貴方にはそろそろ人に興味を示して欲しいのよ。」

レオン「はあ……なんでそんな事で……」

人間に興味を示さないのは自分でも分かっている…でも本当に興味が無いんだ……  
ある人達を除いてな。

涼子「なので来週からI S学園に通ってね」

レオン「ふざけるな！ふざけるな！バカヤロー!!?」

この運命は変えられないようだ……

涼子「I S学園通ってくれたら新装備開発してあげる。」

レオン「よし行こう！さあ行こう！」

新装備が出来るなら話は別だな。俺はそう思い家に帰るのであった……

## 展開速いがIS学園入学

レオン side

あの騒ぎから一週間が経った……俺はマジでIS学園に入学する事になった……悲しいな……今はそのIS学園の教室の中に居る……やはり男性操縦者だからか注目を浴びますねえ……暗殺者としては注目を浴びるのは苦手なものですけどねえ……

レオン「はあ……面倒な事に巻き込まれたなあ……」

俺はそう小言を漏らす……後母さんが言ってたけど2人くらい女子をこっちから入学させるとか言ってたかったっけな？

沖田「その女子とは私達の事ですよ、マスター」

その声は……

レオン「巴御前に沖田総司か……母さんありがとう！」

よりによって一番親密度が高い2人とか最高じゃないですか!!この3年間は安泰だ!

山田「はい、皆さん席に座ってください！」

なんか子供っぽい先生が現れた。2人は席に座った。俺は元々席に座ってたもん。

山田「これからこの一年一組を担当する副担任の山田真那です！宜しくお願いします！」

うわつ、めっちゃシーンとしたよ。そして山田先生半泣きだよこれは。

山田「では自己紹介をしてください！まずはあいいうえお順であの人からお願いします！」

そして皆が自己紹介をしていく中、俺は何をしていたのかというところ……

レオン「……あつ、ジェクトからメッセ来てた。」

SNSしてました。ちなみに内容は今度タイムマンしようぜとの事。あの馬鹿力ゴリラとはあまり戦いたくないんですけどね。

レオン「まあ……構わんよつと……」

俺はジェクトにメッセを送った……まあタイムマンだからまだ楽だ。すると自己紹介がああ織斑一夏の番になった。

山田「……りむら君、織斑君！」

一夏「はっはい!?!」

山田「次の自己紹介織斑君なんだけど……大丈夫？」

一夏「はい！分かりました……」

そして織斑一夏が立ち上がる……

一夏「俺は織斑一夏です……」

おいまさかこれで終わりってことないよな？

一夏「……以上です！」

俺と巴と沖田以外は全員ずつこけた……ここはコント集団のクラスか？

千冬「真面目に自己紹介せんか馬鹿者」

一夏「げえ!? 関羽!?!」

一夏がそう言った瞬間出席簿クラッシュを頭に直撃した。痛そうだな。

千冬「織斑先生だ馬鹿者。」

そう言うのと教卓の前に立つ先生

千冬「一年一組担任の織斑千冬だ！ 貴様らを1年で1人前に育て上げる！ 反論するのはいいが返事はしろ！ イエスかハイで返事だ！ それ以外は認めん！」

腐女子「「はい！」」

怖いなこのクラス……恐怖政治かよ。

千冬「影月、自己紹介しろ。」

そしていきなり俺のターン……正直ターンエンドしたいなあ……まああの人やし逆らつても得はしない。そう思い俺は席を立つ

レオン「影月レオンだ。仕事上あまりこの世間に疎いんだ。だが気軽に話しかけてく

れ。皆とは友達になりたいからよ。」

俺は席に座る。すると女子から歓声が巻き起こる

腐女子A 「眼帯系のイケメンよ!!」

腐女子B 「クール系の男の子!」

腐女子C 「レオン君に攻められたい!」

腐女子D 「いや受けもありかも!?!」

凄いな女子……男に飢えてるのか? そうなればこの身は巴と沖田に守ってもらおう

!

千冬「静かにしろ! これでSHRを終わる! 次の授業の準備をしろ!」

一校時目から授業か……憂鬱だなあ……

巴 side

私の名前は巴御前。マスターのサーヴァントでございます。マスターと言うのは影月レオンさんの事です。マスターの母上様から一緒に入学してほしいとの事で私は沖田総司さんと入学してきました。まあ同じ一組と言うのは予想外でしたけどね。

巴「さて、授業の準備も終わったことですし、マスターの元に……」  
私はマスターの元へ行った……

沖田「マスター！放課後沖田さんとお団子食べましょう！」

レオン「おう、お安い御用さ……巴も来るか？」

巴「はい、ご一緒させてもらいます。」

今日頑張る理由ができました。マスターとお団子！前は忙しかったのであまり接することが無かったのでこれは千載一遇のチャンスです！

一夏「よお！」

レオン「……おう」

いきなり現れた織斑一夏……て言うか開口一番にこれですか……レオンさんも嫌々応答してるみたいです。

一夏「俺は織斑一夏だ！お前は影月レオンだろ？よろしく！」

レオン「初対面にお前呼びわりされるのは些か腹立つな。」

マスターがちよつと口悪くなってます……段々怒ってますね……

一夏「そんなこと言うなよ、同じ男同士頑張ろうぜ？」

レオン「馴れ馴れしい……帰れ」

その言葉だけで一夏を帰らせた……そしてマスターは席を立ち

レオン「散歩してくる」

沖田「ちよつと!?そろそろ授業始まりますよ!？」

レオン「構わねえ……別に勉強する所くらい予習済みだ。」

そしてマスターは出ていった……そして私達はまだ知らなかった……レオンさんの怒りがあの時どれだけあったのかを……織斑一夏がどれだけ愚か者なのかを……

# 金髪さんとセフィロスさん

レオン side

……俺は今屋上に居る……理由はイラつきを抑えるためだ……あのままで居たら間違いない爆発する……

レオン「ふう……危ない危ない……馴れ馴れしいのは嫌いだからなあ……」

俺はさつき買ってきた缶コーラを飲む……俺の大好きな飲料水だ。

セフィロス「何をしている……レオン。」

レオン「……セフィロスさん!？」

セフィロス「師匠でもあるがそれ以前に部下だ……呼び捨てでいい……」

レオン「いやなんでセフィロスが居るの!？」

ちやつかり呼び方を直す……まあレオンクオリティさ。しかし何故この難攻不落のIS学園にセフィロスが来てるんだ？

セフィロス「お前に会いたかった……久しぶりにな。」

レオン「えっ……それってまさか……」

目と目が逢う……いやこれ以上言ったらマジモンになりかねん……

レオン「でも良く入ってこれたな……」

セフィロス「監視カメラに写らない速さで通れば問題ない……」

レオン「縮地かい」

この程度に縮地を使うセフィロス……暇人なのか？ちゃんと鍛錬してんのか？

セフィロス「鍛錬は怠ってない……レオンこそ鍛錬が怠ってるのではないか？」

心読んできた!?

レオン「失礼だな……俺だつて毎日ランニングと素振りしてます。後屋根飛びかな。」

セフィロス「ふむ……いい訓練内容だな……」

俺たちは世間話をしてしばらくするとチャイムが鳴った……

セフィロス「ふむ……今回はこれでお開きだな……またな、レオン総帥」

レオン「久しぶりに俺の事総帥って呼んだな……」

俺はセフィロスが屋根飛びをする所を見送り俺も教室に戻った……

## I S 学園教室

レオン「さて……次からは本気出すか。」

俺は欠伸をしながら席に座る……すると巴と沖田がこっちに来て

巴「マスター！あまりサボりは良くありませんよ？帰ったら説教です！」

マジかよ……巴の説教は長いんだよ……

沖田「マスター！さっきはマスターが居なくて沖田さん寂しかったんですからね？あまり不用意に居なくならないで下さい！」

沖田には寂しいから一緒にいると言われた……沖田の依存癖は今に始まった事じゃないけど……まあいいか……

レオン「まあ聞いてくれよ二人共、さっきセフィロスに会ったんだよ。」

セシリア「コホン、ちよつと宜しくて？」

巴「ええ！十機神参謀総長のセフィロスさんに!？」

沖田「沖田さんも会いたかったです……」

うんうん……やはり二人共会いたかったのか……

レオン「後その金髪嬢、なんか用事か？」

セシリア「まあ、私を知らない？イギリス代表候補生にして主席入学のこのセシリア・

オルコットを？」

レオン「……ああ、イギリスでちよい有名なオルコット家か。」

セシリア「なんですのちよいって!？」

だって……皇帝からの報告書にはそう書いてあったし？俺は世間に疎いって言ったからよく分からんし？結論言う……俺は悪くない？(A。、)？

レオン「でも……オルコット家はもうお前だけなんだよな？」

俺は普通に地雷を踏んでいく……こうすることで人に嫌悪感を与えられる……まあ興味無い人間の追い払い方だよ。大半は使えないけど。

セシリア「……そうですね……私……だけですわ……」

そう言つてオルコットはそのまま悲しそうな目をして戻つていった……

巴「大丈夫だったのでしょうか？」

レオン「あまりあのタイプには関わりたくない……女は認めた奴しか好きになれないしな。」

巴「えっ？それつてまさか……」

レオン「ククツ……さあね？」

巴「答えてくださいよー！」

巴と俺の口論はチャイムによって掻き消され、席に座つていった……

千冬「では授業を始める前に！クラス代表を決めてもらう！推薦された者に拒否権など無いぞ。」

相変わらずの千冬パワー…流石である…すると周りの女子が…

女子A「はいはい、織斑君がいいと思います。」

女子B「やっぱりそう？」

女子C「男子は有効的に利用しなきゃね？」

おい今聞いてはならん言葉を聞いたぞ俺は…すると織斑一夏が

一夏「えっ!?何で俺なんだよ！なら俺はレオンを推薦するぞ！」

レオン「……………チツ」

何で俺なんだよ…!!俺は沖田とお茶飲んだり巴とゲームしたりで忙しいんだよ！

千冬「じゃあ、影月と織斑でクラス代表決定戦を……」

と千冬先生が言いかけた時…

セシリア「納得いきませんわ！」

机を叩き立ち上がるオルコット……よく机が壊れなかったな……お見事。

セシリア「ただ男であると言うだけで代表に選出されるなんておかしいですわ。そもそも男がクラス代表などという屈辱を私に一年間味わえと言うのですの!？」

うつわ……こいつ結構な爆弾発言したぞ? やべえやべえよ……俺はどうでもいいけどな。

セシリア「そもそも、技術的に後進的な国に来なければいけないこと自体精神的苦痛ですのに、これ以上私に苦痛を味わえなんて言うのですか!？」

………これはもう国際問題だぞこれ……

沖田「マスター、録音完了です。」

レオン「良くやった沖田。とりあえずそれは保管しておけ。」

沖田「分かりました。」

とりあえずこういうのは録音しておくべきだよなあ……

一夏「イギリスだってたいしたお国自慢無いだろ。世界マズイ飯ランキング何年覇者だよ。」

(  ) もうこの顔になる他無いだろ……しかも沖田と巴も同じ顔になってるし……?

セシリア「なんですの!?! 私の国を馬鹿にしますの!?!」

一夏「お前が先にバカにしてきたんだろ!?!」

はあ……………なんて低レベルな喧嘩するかな……………それに国際問題級の発言してくるし

……………

セシリア「あなたは何か言うことは無いのですか!?!」

ええ……………オルコットよ俺に振るなよ……

レオン「……興味無い」

一夏「レオン! 日本を馬鹿にされて悔しくないのか!?!」

レオン「……日本に愛着は無い」

セシリア「……まあ、とんだ腰抜けですわね。」

レオン「……………」

腰抜けでもいい……………今を生きればそれで問題ない……………自分をバカにされるならどうでもいい。

一夏「ならレオンの家族も腰抜けなんだな!」

こいつ今なんつった? 俺は一夏に殺気を向ける……………なあに……加減はしてるさ

セシリア「そうですね! 子供が腰抜けなら親も腰抜けですわ!」

レオン「……クソガキども……いつちよ一週間後にISでタイマンしようぜ?」

流石に父と母を馬鹿にされたら殺るしかない……特に一夏……てめえは半殺しじゃ済まなくする……て言うか一夏とオルコット怯えてるし……この殺気結構加減してるけどな。

セシリア「いいですわよ！せいぜい足掻くことですわね！」

一夏「いいぜ、俺もその方が分かりやすいぜ！」

二人も納得したな。

千冬「コホン、では！一週間後にアリーナでクラス代表決定戦をおこなう！その間の私闘は禁ずる！」

これでクラス代表の件は終わった……疲れたわ。

巴「……マスター、パライソに暗殺を依頼しますか？」

レオン「いつもの俺ならそうするが今はいい……俺が喧嘩売ったからな。」

沖田「流石マスター！沖田さんはまたマスターに依存してしまいます！」

満面の笑みで沖田は何を言うんだ……そう思い俺は授業に集中した……

放課後、俺と沖田と巴は教室で団子を食べながら話してた……ほら、放課後お茶するって約束してたし？

巴「一夏って言う人……あまり私は好みませんね……自己中ですし……なんか……少し歪んでます。」

と巴は言う……人間観察力高いよな巴は……俺の気が付かないところまで見てるし……

沖田「でも実力が計り知れますね……あの程度ならパピルスさんでも倒せるんじゃないですか？」

と沖田は言う……まあ弱そうだし……まずオーラが貧弱だ。

レオン「俺が面倒なのは金髪嬢なんだよ……多分専用機を持つてるからさ。」

沖田「代表候補生とか言っていましたね。マスターのISを使わないといけない状況ですよね。」

沖田の言う通りだ……俺の専用機を使うハメになりそうだな。

山田「あ！影月君！」

談話している所に山田先生が殴り込んできた……

山田「影月君は今日から寮生活となります。」

レオン「あれ？俺自宅から通うんじゃないのですか？」

山田「急遽保護の意味も兼ねて政府が寮生活としました。」

まあ男性操縦者だもんねー、いつ誘拐されるかわかったもんじやないし？

山田「荷物はもう部屋に届いてるので、心配しないで下さい。」

そう言われて山田先生から鍵を渡された…なにに…1096号室か。

巴「私と沖田さんは同じ部屋ですし、隣同士ですね。」

沖田「沖田さん大勝利です！」

ちなみに巴と沖田の号室は1097号室らしいよ。

レオン「んじやそろそろ行くか。」

巴「そうですね、お茶も済みましたし」

沖田「今度は部屋の中でお茶会しましょう！」

そんな話をしながら教室を出ていった…

ここが寮の部屋か……俺は今自分が住むようになる部屋の前に居る……さて……ドアを開けよう。

レオン「よいしょっと」

ドアを開けたその先には……

楯無「おかえりなさいアナタ！ ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ それともア・タ・シ？」

レオン「沖田！ 巴！ 援護頼む！」

痴女が居た……

## 痴女撃退ノ法

沖田 side

マスターが住む部屋の前で別れた私達は部屋に入ろうとしました……しかしそこで事件が起きました。

レオン「沖田！巴！援護頼む！」

まさかの緊急援護要請が入りました……部屋が隣なのですぐいけますが……どんな人だろうとマスターに手を出す輩は成敗します！

沖田「承知！」

私と巴はすぐに荷物から刀を、巴は弓矢を取り出しマスターの元へと急ぐ。

沖田「マスター！不届き者とは誰の事ですか!?!」

私は刀を抜きそう言った

レオン side

沖田「マスター！不届き者とは誰の事ですか!？」

巴「マスターに仇なす者か！ここで討ち取る！」

沖田は刀を構え、巴は弓を引き本気で殺しにかかる…そう言う雰囲気だ。

榎無「ちょ!?!待って話を聞いて!？」

痴女がめつっちゃ慌てる…まあ慈悲はないけどね！

レオン「おい…ハニトラで殺そうってんなら間違いだつたな…俺にハニトラは効かない」

だつて英霊達ナイスバディな人達ばつかだし？俺の理性はそこで鍛えたんで

榎無「私は殺そうとしないよ!？」

レオン「でも裸エプロンは無いだろ……」

俺は心底呆れそう言った

榎無「これは挨拶代わりよ？どう？興奮した？」

レオン「痴女に興奮する要素皆無」

俺はそう言い切った…なんかその水色の髪の毛の痴女は膝から崩れ落ちて落ち込んでいる。

レオン「済まないな沖田に巴、後はもう大丈夫だ。」

巴「本当ですね？何かあったら呼んでください。」

沖田「すぐに沖田さんが来ますよ！では！」

そう言つて沖田と巴は武器を降ろし自分の部屋へと戻つていく……

レオン「さて……そろそろ部屋に入らせてくれないか？痴女さん？」

楯無「だから私は痴女じゃない！」

部屋に入れてもらった……て言うか俺の部屋なのにな……

レオン「さあて痴女さんよ、あんたの名前はなんだ？」

楯無「だから痴女じゃないって……私は更識楯無。楯無つて呼んで。」

レオン「俺は見てわかる通り影月レオンだ。レオンと呼んでくれ。」

まあ呼び名はどうでもいいけどな。

楯無「レオン君つて……初めて会った気がしないのよね……」

レオン「……俺は初めて会ったぞ。」

楯無「そう……気のせいなのかしらね……」

嘘だ。俺はこいつを一回助けた記憶がある……秩沌戦争の時にな。あの時は確か……刀奈という名前だったか。

レオン「俺はもう寝る……楯無さんはどうする?」

楯無「呼び捨てでいいわよ……私も寝るわ。」

レオン「呼び捨ては信用出来るようになってからからだ、おやすみ。」

俺はそう言つて布団を被る……

楯無「おやすみなさい。」

楯無も同じく布団を被つて眠つた……

楯無「……zzz」

ふむ……楯無は寝たようだな……とりあえず俺は起きてパソコンの電源を付ける……

レオン「やる事は……今日の報告と……イギリス代表候補生の専用機情報を集めよう。」  
俺はパソコンを使い報告をまとめる……

レオン「……しかし今日は色々あつたな……まさか……刀奈に会うなんてな……」

俺は確かに刀奈を助けた……しかし本当は助けたい人……本来なら敵同士のはずなのに……何故か助けてしまった……なんで助けたのかは俺にも分からない……

レオン「……このままバレずに三年間を過ごせるといいな……」

俺はそう思い報告を終わらせパソコンを閉じる……専用機の情報は皇帝に一任していた……眠いし面倒だ。

レオン「……明日も頑張ろ……」

俺はそのまま眠った……

朝4時半

レオン「……ふむ……」

俺はいつも起きるのが早い……たまに遅い時があるがほとんどは朝4時半に起きる。

レオン「さて……今日も1日ががんばるぞい！」

某アニメの名言を言いながらジャージに着替え部屋を出る。

レオン「まずは……アリーナの外を走るかな。」

俺はすぐさまアリーナの前まで歩く……廊下は走っちゃダメだから。するとちらほら人がいるな……俺と同じく朝のトレーニングだろうか。

上級生A「あつ！噂の男性操縦者だ！」

上級生B「ホントだ！」

デスヨネー。俺が通りかかると毎回この始末だしなんとかならないかな……

3年生「おはよー！確か影月君だっけ？」

レオン「おはようございます。影月レオンで合ってますよ。」

3年生「影月君もトレーニング？」

レオン「はい、貴方達もトレーニングですか？」

俺は敬語で話す……え？水色痴女と対応が違うって？まああの人の行いのせいだよ。だって普通裸エプロン未遂（中に水着を着ていた模様）の人に使う？敬語なんて？

3年生「私達もだよ！良かったら一緒にやる？」

レオン「それは良いですね。是非やらせてもらいます。」

これを機にIS学園生徒の実力を見てみようか……俺はそう思いランニング場所へと行くのである……

アリーナ前

さて……トレーニングも一通り終わった……まあ過程は残念ながら省いておいた。

3年生「……レオン君……速すぎない……?」

レオン「それでも無いですよ?」

3年生「一応私は3年生の中でも上位の運動神経なんだけど……」

えっ?これで3年の上位?笑わせてくれるじゃあないか。

レオン「さて……後は最後の仕上げが残ってますね……」

3年生「えっ?まだ何かやるの?」

そうそう……セフィロスさんから昔やれと言われたあのトレーニングさ……

レオン「よっと!」

俺はアリーナの屋根まで飛んだ。

3年生「……はっ?」

一緒にトレーニングした人が唾然としてる……まあ普通はそうなるか

レオン「では今日はありがとうございました〜!」

俺はそう言って建物の屋根を飛んで行く……これが縮地を伝えるようになるトレー

ニングの一つ……屋根飛びだ。

3年生「……影月レオン……恐るべし……」  
とあの人は言っていた気がする……

### 食堂

俺はあの後、屋根飛びしまくって部屋に戻った……とりあえずジャージから制服に着替えてから巴と沖田を起こしに行った……あの2人は朝は弱いからねえ……後また楯無さんの冗談とからかいがありました。華麗にスルーさせて頂きました。そんなこんなで俺と巴と沖田は食堂に来てます。

レオン「朝飯は……何にしようかねえ……」

巴「私は天ぷら定食ですね。」

沖田「沖田さんは……焼き鮭定食です！」

お前から日本のサーヴァントだから日本食か……しかし色々種類があるんだな……ん  
じゃ俺は……

レオン「餃子定食だな。」

最近中華系食べてなかったし丁度いいかな……それになんか麻婆定食もあったけどなんか愉悦を感じたのでやめといた……

レオン「しかし食堂は広いな……」

巴「マスターの母上の社員食堂よりも大きいですね〜」

レオン「そうだな……」

巴の言う通りだ。まさかこれほどまででかいとは思ってもよらんな……

沖田「あつ、ご飯きましたよー」

沖田が声掛けてくれたので朝飯を取り席に座り何事も無く食べた……途中なんか織斑一夏が他所でうるさかったが気のせいだな。

レオン「さあて……どうしてやろうかな……クラス代表決定戦。」

俺はそう思いながら食堂を後にした。

## 金髪嬢VS暗殺者

レオン side

アリーナピット内

あれからなんやかんやありまして一週間が経ちましたなあ……え？早くないかって過程は飛ばした後悔はしてない！

「て言うかそろそろあいつらが来るんだけどな……俺の専用機を持つて」  
「遅いですね……」

あまりに遅いのだ……いや、確かに前日にメンテナンスが入ったのは想定外だったのだが……それでも朝には普通届くはずだ。

「……では先にオルコットと一夏の試合を始める。」

千冬先生がそう言った……すると一夏は

「よし……この白式で勝ってみせる！」

とかほぎきながら行った……ちなみに織斑一夏はこの一週間、篠ノ之とか言う女と剣道をしてトレーニングしてたそうだ。馬鹿じゃないんですかね？

「…勝敗は見えてるな。」

「ですね…実力差の問題ですね。」

「まあ…確かに実力差だが…でも白式は切り札があるから分らんぞ？」

ほう…面白い事言うじゃないか千冬先生。

「……きたぞ……」

俺がそう言った先に居たのは……大剣を持った鎧男とピエロ姿の男だ。

「すまんレオン、メンテナンスが遅れてしまった。」

「いいよガーランド。こうして間に合ったからさ。」

「僕ちゃんは仕事の帰りのついで〜！」

「ケフカ……お前の喋り方なんとかしろよ……」

俺の待機形態のISを持つガーランドとふざけた足取りで来たケフカが俺の前に来る……

「…レオン…その者は？」

「千冬先生にはまだ紹介してませんでしたね。フェニックス社の社員ガーランドとケフカですよ。」

「お初にお目にかかる千冬殿。」

「気軽にケフカって呼んでねー！」

「ああ、宜しく頼む」

千冬先生ちよい動揺してない？主にケフカのせいで

「レオンよ、ISだ。」

「おうよ。」

俺は自分のISをもらう……待機形態は指輪だ。

「ちよつと乗つてみてー！」

ケフカがふざけながら言う……まあ良いだろう。

「……来い……カオス！」

俺がそう言った瞬間……いかにもこの世の魔獣の集大成みたいな形態をしてるISが具現した。

「……それがレオンのISか？」

「そうですよ。」

千冬先生が絶句してる……あまりの気持ち悪さに山田先生は気絶してる……流石にカオス泣くよ？

「まあ気持ち悪さはあるけどそこら辺のISとは比べ物にならないよーん！」

確かに……俺のISは全てを想定して作られたものだ。武器も強力なものばかりだ。

「……織斑一夏が帰ってきましたよ」

「…そうか…なら行つてこい！」

俺は千冬先生にそう言われ外に出る事にした。

「行くぜカオス…：久しぶりにその力を見せな！」

アリーナ

「さあて…：金髪嬢はどこかなー？」

俺は辺を見回す…：すると正面に居たわ…：

「…なんですの…：その気持ち悪いISは…」

酷くね!?皆カオスをそうやって嫌うの!?

「なにつて…：俺のISさ。」

「…倒せばいいだけの話ですわ…」

こいつ…：こっつ腹立つなあ…：まあいいや。

「さあて…：最初から本気で来いよ！」

「言われなくても！」

そう言つた瞬間、試合開始のブザーが鳴る。

「さあ行きなさい！ティアーズ！」

そう言つてオルコットは4基のビットを出してきた……ほう……  
「話聞いた通りだな……よつと!」

俺はとりあえず常備されてる爪の刃でティアーズを破壊していく。

「そつちに気を取られ過ぎではありませんの?」

オルコットは俺にライフルで撃つてくる……うひよー…怖いねえ

「そんなんじや俺に勝てねえぞ?」

俺は一つ目の武装、名刀マサムネを取り出した。

「そんな細い剣で何をするのですの?」

「まあ見てなつて……」

俺は集中する……オルコットの射撃を避けながら……そして……

「縮地」

俺は一瞬でオルコットの目の前まで来た……そしてオルコットのライフルを細切れにする。

「!!?」

オルコットは何が起きたか分からずパニックになる……当たり前か……初見で俺の縮地を避けられるのは師匠しかない……

「はあ……それが本気か?」

「……………いえ……………まだですわ…インターセプター！」

おう…近接武器を出してきたか…………

「それにティアーズは後2基ありましてよ！」

えつまじで？後ろからなんか衝撃が来ると思ってたらティアーズだったのかあれ…………仕留め損ねたかな…反省だ…………

「本気で来い！俺もこの刀の本気を見せてやろう！」

「ええ……………いきますわよ！」

オルコットは一気に距離を詰める…………そして俺に近接武器を刺す一歩手前…

「ほう……………ここまで来れたか…………俺も鈍ったもんだな。」

そのまま近接武器を弾きこぼす…

「贖罪」

オルコットの機体…腕や足を八回斬りそのまま機体ごと吹っ飛ばすと言う大技を使った…………まさかこいつ如きを使う事になるとは…………成長したら面倒くさそうだな。

「オルコット戦闘不能、影月の勝利！」

そうアナウンスが流れた…………俺はISを解きオルコットの所に行くことにした…………

セシリア side

「贖罪」

そう聞こえた瞬間、何が起きたか分からずただ攻撃を受けるだけでしたわ……そのままアリーナの外壁まで飛ばされ……グツタリとしている所に彼はやって来ました……

「……ほら、立ちな？」

彼は私に手を差し伸べました……でも敗者に何故手を差し伸べるのか分からないですわ……

「戦った以上、他人という訳にはいけねえよ。」

彼はそう言い、私を立たせてくれました……その時に握った手は……力強くも……優しい手……でしたわ……

「私……貴方に数々の罵倒を……」

「気にすんなよ……別に……でも巴達には謝っておいてな？あいつら何するかわかんねえから……」

確か影月さんと一緒に居るあの2人ですわね……確かに殺気が尋常ではありませんでしたわね……

「あの2人とはどのような関係で？マスターとか仰ってましたけど……」

「……今度話すわ……長くなる。」

レオンさんはそう言つて顔を背ける……何か触れてはいけない事に触れたのでしようか……

「まつ！何はともあれ、俺はお前を許す！戦つた以上他人では無いしこれから宜しく！」  
そう言つて握手を求めるレオンさん……昨日の敵は今日の友とはこういう事を言うのですね……私はその手を握り

「はい、これから宜しくお願ひしますわ。影月さん。」

「おうよ、オルコットよ。」

「いえ、セシリアとお呼びください。」

私はそう言う……しかしレオンさんは

「あー……あまり会つて数日の人を呼び捨てにするのは気が引けるな……」

レオンさんは下を向いて少し恥ずかしげに言う……意外に可愛いですわね……

「なら……徐々にで良いですわ……いきなり名前で呼べなんて難しいですものね。」

「そう言つてもらえると助かる……」

そう言つてピットの中に戻るレオンさん……さて……私も戻るとしましょう……

レオン side

「レオンよ、機体の調子はどうだったか？」

「絶好調だぜガーランド。」

俺はそう言い IS を解く……次は織斑一夏だな……さあて……どうしてくれようか  
……

「よっ！レオン！」

「馴れ馴れしい……名前で呼ぶな。」

「良いだろ？男同士なんだし」

「そんな理由で呼び捨てが許されると思うな。」

俺はそうキツパリと言う……すると後ろに居る箒頭の人が

「なんだ貴様！一夏に対してなんて態度だ!!」

そいつは俺に木刀を振り下ろした……

「あまりに脆い！」

俺はそう言って木刀を蹴って折りついでの脇腹を蹴っておいた。

「ぐはあっ!？」

箒頭はそのまま吹っ飛ばされその場で脇腹を抑え気絶した……加減間違えたか？

「おいレオン！お前なんで女に手を出した!!」

織斑一夏は俺の胸ぐらを掴みそう言う……

「あのまま受けろってか？」

「女に手を出してはいけないって習わなかったのか!？」

「生憎俺にはそんな常識通用しない、後あのまま受けてたら即刻救急車だ、俺も自分の身は大切だ。」

俺はそう言い切った。

「……次の対戦でお前の腐った考えを正してやる!」

「結構結構……」

俺の事をお前呼ばわりねえ……やはりこいつは一回再起不能にしてやるか。

「レオン、あまりやり過ぎるなよ?」

「加減はします。」

俺はそう言って次の対戦に赴く事にした。

## サッカー程楽しいものは無い

レオン side

ピット内

「あの小僧殺していいか？」

「ぼくちんなら爆散させられるよー？」

「沖田さんも久しぶりに人斬りの血が騒ぎます。」

「IS学園ごと燃やしましょうか？」

上からガーランド、ケフカ、沖田、巴と殺気じみた声で言う。

「待て、あれは俺の獲物だ。」

「しかし…まさかこれほど自己中な奴とは…皇帝も真つ青な性格よのう。」

確かに、皇帝の方が100万倍マシだ。

「あつ！レオンあれやったらー？」

ケフカがそう言う……俺は少し考え込みすぐに答えを出した。

「あの技か？」

「そうだよー！」

なるほど……一応再起不能にすると千冬先生に色々文句言われそうだから……半殺し程度にしてやろうか。

「よし、行ってくるわ。」

「頑張ってくださいーい！」

「無理しないでくださいいね。」

沖田と巴にエールを貰い俺はアリーナに出るとする。

アリーナ

「カオス…もう一仕事宜しく！」

俺はカオスを展開して織斑一夏のIS白式を見る……

「来たなレオン！その腐った考えを正して箒に謝らせてやる！」

「ほう……ならば俺に1回でも攻撃を当てれば、箒とかいう奴に土下座してやろう。」

俺はそう言う。それと同時に試合開始のブザーが鳴る。

「先手必勝だ！」

雪片式型を持ち俺に突撃してくる……

「なあ織斑一夏……」

俺は爪のブレードを収納する。

「なんだ、降参か？」

織斑一夏は特攻で近づいてくる……俺はその特攻を避け後ろを蹴り上げる。

「ぐっ!!」

「サッカーしようぜ!!」

俺はそう言つて蹴り上げられた織斑一夏を縮地で追いまた蹴る。

「ガハッ!!」

「お前ボールな！」

俺はそう言つて蹴った方向に先回りして蹴るといふ一人サッカーを始めた……縮地の応用次第でこんな楽しい遊びが出来るなんてな。

「くそっ！卑怯だぞ！」

「えっ？君ちゃんと武器持つてるじゃん？俺足だけじゃん？俺の方が弱いよ？」

と言いながら一人サッカーを続ける。

「もう……動けない……」

織斑一夏のSEが残りわずかになったので、最後は

「オーバヘッドキック！」

俺はオーバヘッドを決め織斑一夏を地に叩きつける。

「織斑一夏戦闘不能！影月の勝利！」

「ふう……ストレスが解消されるねえ！」

俺はそう言ってカオスを解きピットの中に戻っていった。

### 教室内

あれから一日が経過しクラス代表は織斑一夏に決まった。何故かと言うと俺とオルコットが辞退したからだ。オルコットは数々の非礼を詫び皆に認められた。良かった

じゃないか。俺はいつもの日常を過ごす…沖田と巴と話しながらね…後その輪にオルコットが追加されたと言おう。

「いやー、オルコットの近接武器には一本取られたわ!」

「でもまだまだ改良の必要性がありますわ。一緒に訓練しましょう!」

「おうよ。オルコットが良いなら相手させてもらおう。」

「沖田さんもISあれば良いんですけど……」

「私もIS欲しいですねえ……なんかガ○ダムみたいでカッコイイじゃないですか!」

おい巴……その先は魔境だぞ

「まっ……フェニックス社で沖田と巴のISは開発中だよ?」

俺は爆弾発言を投下する……

「ホントですか!」

「マジマジ、しかも第五世代だとよ、ガスター博士が言ってた。」

そう言つて沖田と巴は喜ぶ……

「…そのガスター博士とは誰なんですか?しかも第五世代?」

「あの篠ノ之束を超える最強の開発者、とでも言つところかね。」

「…レオンさんは一体何者なんですか……」

人間だよ。俺は思い予鈴がなる前に皆を座らせた…ああそうそう、箒頭の事だがあの

後普通に起きたらしいよ。しかも俺の手加減あつてか無傷に等しいレベルにまで抑えた。まあ痛みは来るけど。

寮部屋内

「楯無さん、俺のシャツを使って何するつもりですか？」

俺は部屋に帰ってきて早々こう言った……理由はなんか俺の脱いだシャツを持っていたからだ……

「……別に？何もしようとしてないし？匂いを嗅ぐだなんてしてないし？」

なるほど、やはり痴女か。

「シャツ返してください、痴女さん。」

「呼び名戻ってるんだけど!？」

「人のシャツを持つてる時点で痴女じゃないですか、しかも匂いを嗅ぐようとしてたし。」

俺は楯無さんからシャツを取る。この人と同室って俺の所持品盗まれそうだな。

「……チツ」

「痴女さん舌打ちしましたね？」

「何言ってるの？する訳ないじゃない？」

「もう疲れたわこの人……」

俺はベツトに飛び込み横になる。疲れるな……

「…ねえレオン君……君って一体何者なの？」

「…影月レオンだよ。」

「違って……なんでフェニックス社の社員と関係を持ってるの？」

「そのの社長の息子だからさ」

「それは分かるけど……あの2人って……」

恐らくガーランドとケフカの事だな……て言うか見てたのか？

「あれでもれつきとした社員さ……」

「………そう……」

そう言つて楯無は眠つてしまう……

「………隠すのも面倒になるぞ……」

俺は小言を言い眠つた。

楯無 side

レオン君が寝た後、私は少し考え事をしてた。内容はあのフェニックス社の2人についてなんだけど……

「……どこかで見たような気がするのよね……」

暗殺組織に確か十機神と言う組織があり、その中で少し見覚えのある人が居ただけ……なんで私がかかるのかって？報告書とかに流れ込むのよ。

「影月レオン……まさか……」

暗殺界最強と呼ばれる影月家とは別だと思いたい……でももしかしたら……

「……敵なのかもしれないわね」

私はそう思い……目を擦り眠る……出来るなら殺し合いなんてしたくない……そう……絶対……

## 中国娘登場ノ乱

レオン side

薄暗い会議部屋

「これから、十機神と総帥による定例会議を始める。」

「そうガーランドが言う……今は一ヶ月に1回の定例会議の日だ。まあ、異常報告だけなんだけどな。」

「では皇帝、外交の状況を報告せよ。」

「俺はそう言う……すると皇帝は席を立ち淡々と報告を始める。」

「では今の状況について、どの国とも良好な貿易や技術共有をしている。しかし、ドイツが不穏な動きをしているのは少し気になります。」

「ドイツの動きとは？」

「暗闇の雲がそう言う……すると皇帝が」

「……ドイツの代表候補生の専用機に試作段階のシステムを入れるそうだ。」

「……怪しいな、調べておけ。」

俺はそう言つて皇帝を座らせる。

「次はIS学園について…総帥、報告お願いします。」

「うむ。」

俺は席を立ち、報告する。

「ではIS学園についてだ。入学当初は女尊男卑の風潮が激しかったが、最近になつて収まつてきたようだ。それに、イギリスの代表候補生と親睦を深めた。後は……更識の動きに引き続き警戒する。」

俺はそう言つて席に座る。

「…これからもつと危険になるでしょうね。」

アルティミシアが不意に呟く。

「……ならば…十機神の一人をIS学園に入学させよう。」

ゴルベーザがそう言う……マジかよおい

「ならば私が行こう。」

セフィロスが立候補した……まさかの剣術の師匠が同じ学校に来るとか怖いんだけど!?

「……異論は無いな……では可決」

「マアジカヨ」

俺はそう呟いた……

「では、この会議を……」

「ちよつと待つて！」

クジャが大きな声でそう言う

「どうした、クジャ？」

俺は聞く

「少し気になる事があるんだ。」

気になる事？俺は引き続き聞く

「…北極の空で炎の柱が立つと言う怪奇現象が起きたつて情報が入ったんだ。」

炎の柱？……俺は疑問に思い考える…

「僕の見当だと……イフリートが来てるんじゃないかな？」

「…馬鹿な……あの世界は閉じたはずだ！」

皇帝が取り乱す…

「…何かがきつかけでその世界が再び開いた…とでも言うか。」

エクスデスはそう言って持つてる武器を拭いている。

「きつかけはどうであれ、正体が分かり次第撃退作戦を組む。それまでは警戒して見張れ。」

「了解です総帥。」

そう言つてクジヤは座る。

「では、これにて今回の会議を終わる。解散。」

俺は考え事をしながら薄暗い会議部屋を出ていった……

## IS学園

「転校生だあ？」

「確か2組の方に中国から来た人が居るだとか」

巴がそう言う。ほう……面白。

「この時期に編入するんだから当然強いんだよな？」

「…分かりませんわね……まだ相手の強さは未知数ですから。」

オルコットがそう言う……オルコットも慢心しないようになったな。成長してきたな。

「まっ、俺は別の事で忙しいんだけどな。」

「なんですの？別のことって？」

「企業秘密さ」

俺はそう言って教室の扉に視線を向ける……すると織斑一夏と変なツインテの人が楽しく喋ってるね……青春だねえ……

「ねえねえ、3組にも転校生が来てるって！」

「三人目の男性操縦者らしいわよ！」

「銀髪の長髪イケメンですって！」

ふと近くの女子の話聞く……なんかその外見既視感あるなあ……

「レオンよ……来たぞ」

教室の扉の前に現れる一人の男……銀髪の長髪イケメン……って

「モテモテだな、セフィロス」

「慣れないな……やはり。」

転校生の正体はセフィロスだった。

昼休み

食堂

「セフィロス、ここが食堂だ。」

「……人が多いな……」

俺は昼休みに施設の説明をした。色々教えた後に食堂にて飯を食う事にした。

「しかしまあ……中国娘も元気なことだよなあ。」

俺は遠目で織斑一夏と中国娘の方を見る……楽しくおしゃべりしてますな……

「しかし……この時期に編入させるのも些か変だとは思うが……」

「まあそこは触れない方がいいだろ。」

必要以上に問題に関わりたくないし

「さて……飯食べて教室戻るか。」

「それもそうだな。」

俺らはさっさと飯食って教室に戻った。

寮内

「グスツ……ヒグツ……」

……何で俺の部屋の前に泣き腫らした中国娘が居るんだ!?

「……邪魔だ」

「この姿で何も言う事ないの!?!」

なんか怒られた……

「俺とお前は初対面だろ」

「うっ……それもそうね……」

初対面の人に怒られて悲しい俺……

「俺は影月レオンだ。」

「私は凰鈴音よ。」

「んで、なんで泣いてたんだ？」

「……聞いてくれるの？」

「まあ……女が泣くって只事では無いと前に教えられたからな。」

「……ありがとう。」

とりあえず俺は鈴を俺の部屋に招きお茶をしながらその話を聞いてた。真剣にな。ちなみに楯無さんは居なかった。

「……難儀な話だ。」

「……私って……もう一夏に振り向いてもらえないのかな……」

朝はあんな元気だったのにな……

「知らん。それは自分次第だ。」

「……レオンって随分辛口ね。」

「良く言われる。」

デフォルトがこうだから仕方ない。

「まあ……なんだ、とりあえず……他の女に負けないでアピールすれば良い。」

「……頑張る……」

小さく頷く鈴……

「んじや…消灯時間二分前だからそろそろ帰れ。凰さん。」

「…さん付けやめてくれる？」

「女性を呼び捨てにするのはあまり慣れない。」

「……変な奴……でも今日はありがと！」

凄い笑顔を見せて部屋を飛び出していった……それと同時に楯無さんが入ってくる。

「何を話してたの？」

「……さあな」

「あっ！教えなさいよー！」

少しのいざこざを終わらせた後、俺はすぐ眠った……ある事を想定しながら……

## 激闘?侵入者?

レオン side

アリーナ更衣室

さて、いきなりだがクイズだ。何故俺はここにいるのだろうか。正解は……今日がクラス代表戦だからだ。俺は3組のクラス代表のセフィロスと共に談話していた。

レオン「いやしかし驚きだな。セフィロスがIS使えるなんてな。」

セフィロス「そうか……ガスター博士は何でも作るから……使えたんじゃないか?」

レオン「それもそうかもな……1回開発室に入ると3年は出てこないからあの人。」

セフィロス「何をしているのか気になるな。」

セフィロスはそう言いながらISの待機形態を見つめる……待機形態は刀だ。珍しいよな。

レオン「……!?!」

セフィロス「どうした?」

俺は微弱な気配を察知する……まさか……

レオン「……今回のクラス代表戦は一悶着あるぞ……覚悟しろ。」  
セフィロス「その時は全力で蹂躪しよう。」

セフィロスはそう言い残し去っていく……恐らくI Sの調整をやるのだろう。俺もとりあえず1組と2組の試合を見に行くため観客席に移動した。

### 観客席

レオン「……何を言いあつてんだあいつら……」

沖田「どうやら鈴さんに色々言つて怒らせたらしいですね。」

あのバカ……女心を分かってないな……鈴が相談した時は告白の言葉を別の意味で捉えたし……昨日の話を聞くと貧乳と言つた馬鹿な奴なんだよな……もうあいつ馬に蹴られて死ねばいいと思う。

巴御前「あそこまで女心分かってないと…逆に同性愛に目覚めそうですね。」

レオン「待て待て…俺が危ない」

沖田「その場合は織斑一夏を斬ります」

沖田は低い声でそう言った…まずいな…この時の沖田は本気でやりかねん。

レオン「やめてくれ…沖田を犯罪者になんかしたくないから……」

俺は切実な願いをした……だって沖田可愛いし…こんない子が犯罪者になんて…駄目だ。

沖田「むう…マスターが言うなら仕方ありません。」

沖田は少しむっとしたが…すぐに笑顔になり試合を見る…一方巴御前は試合を見ながら前俺が買ってやったプリンを食べてる…めっちゃ笑顔で俺が癒された。しかし…

レオン「…!?!」

沖田「…この気…」

巴御前「人ならざるものの気配……」

俺らは即座に行動を開始しアリーナ更衣室へと向かった……

セフィロス side

アリーナ控え室

ふむ…初めましてと言っておこう…私はセフィロスだ。今はこのクラス代表戦という物に興じてる…しかし皆は珍妙なものを使ったがる…ISという物は拘束器具でしか無い…例えるならエクステスの鎧くらいの拘束器具だ。と言うかエクステスはなんであんな鎧を着ているのか分からん…

セフィロス「…来たか…」

私は控え室に来る前…ある気配を察知してた。それは…

レオン「セフィロス。任務だ。戦闘準備をしろ。奴が来る」  
セフィロス「了解した。レオン総帥」

総帥が任務と言うと仕事に切り替わるため私もいつもの呼び捨てではなく…総帥と呼ぶ。

レオン「戦闘準備が出来次第、敵が来るまで待機せよ。」

セフィロス「了解した。」

そう言つて私はISの刀をしまつて、いつもの正宗を持つ…愛刀はやはりしつくりくる。そして総帥はそのままどこかへ走つて行つた……

セフィロス「…しかし…敵の気が二つというものも…やはり楽しそうだ。」  
私はそう思いつでも出れるように待機した。

アリーナ観客席

レオン side

レオン「巴と沖田は避難誘導の準備をしろ。」

巴御前「はい、分かりました。」

沖田「頑張りますね！」

よし、二人共いい返事だ。沖田と巴は準備するべく別行動となつた。

レオン「さて…問題は…このシールドをどう突破するかだ。」

俺は考える…普通には斬っても良いんだけど…それじゃシールドが全部破られ危険が増す…ならば…

レオン「磁場転換か。」

エクステスが使ったレポートみたいなものだ。あれは本当に使いやすくて良い。

レオン「…さて…お出ましか」

俺は空を見る…化物が二体降りてくる光景を見ながら楽しみに笑った。

アリーナ

鈴 side

一夏のバカあつ！散々私に想わせといてあの返しは何よ！酔豚を毎日奢る!?!なんで分からないの!?!私なりに頑張った精一杯の告白を…

鈴「一夏なんて死んでしまえ！」

一夏「だから俺は何をしたんだって!？」

私は双牙天月を一夏に投げる……一夏はそれを受け止めるがS Eが削られていくのがオチ……

鈴「もういいの！一夏なんて嫌いっ！」

一夏「なんでそうなるんだよ！」

私はトドメに一夏に衝撃砲をくわすため狙いを定めた……その時だった……アリーナに2体の化物が侵入してきたのは……

鈴「……なに……あれ……」

目を疑った。この世で見たことも無ければ居ることさえ違和感を感じるモノ……一体は炎を纏う人形の化物……もう一体は鋼鉄の鎧に身を包んだ巨大な兵士……

鈴「……ああ……!？」

私は腰を抜きし座り込む……立とうとしても立てない……このまま化物に殺されるのだろうか……

???'「……」

炎の化物が私に近寄る……

鈴「いや……来ないで……」

私は後ろに下がるが……すぐに壁際に追い詰められる……

??? 「……アアア！」

炎の化物は球体の炎を私に投げる……

鈴 「くっ……」

私は抵抗する気も失せ……このまま死を受け入れる覚悟をした。

??? 「……グルアア！」

化物が爪を振り下ろし私を串刺しにする……

レオン 「おおっと、あまり生徒を虐めるなよう？」

ことは無く……目の前で化物の爪を剣で受け止めたのは……影月レオン……前に相談を引き受けてくれた二人目のIS操縦者だった。

## セフィロスVS鉄巨人

アリーナ

セフィロスside

流石にパニック状態になる観客席。しかし総帥のサーヴァント達によってスムーズに避難が進んでいく……さて……私もやるとするか。私は剣を持つ鎧の大男の方に向かう。

一夏「…なんなんだよ…こいつ…!」

ふむ……雑魚が大男と戦ってるな……

???「ウオオ!」

大男は雑魚を掴みアリーナの外壁に投げつける。

一夏「ああああ!!」

雑魚はそのままISが強制解除され気絶した。とりあえず放置でいいか。私は片目を抑えこう唱える。

セフィロス「見破る……!」

これはマテリアの能力……敵の名称と能力を知ることが出来るものだ。

セフィロス「鉄巨人……か……能力は……剣技……ふっ……楽しむそうだ。」  
私は自分の刀を構え鉄巨人にこう言う

セフィロス「許しを乞う姿を見せてみる……」

鉄巨人「……アア！」

鉄巨人は私目掛けて剣を振り下ろす……

セフィロス「……凶体に見合わず速いな……」

私は剣で受け止めるが……重いな。それを弾き私からも攻撃を仕掛ける。

鉄巨人「フンッ！」

鉄巨人はそれを剣で受け止め跳ね返す……

セフィロス「なかなかやるな……」

鉄巨人は剣を地面に叩きつけ衝撃波を地面に伝え私に向かってくる……古典的だ。

セフィロス「衝撃波とは……こういう事を言うのだ。」

私はその衝撃波を弾き飛ばす。そして縮地を使い鉄巨人から離れ剣を振る……すると複数の衝撃波が鉄巨人を襲う。

セフィロス「耐えられるか……？」

鉄巨人はその衝撃波を弾こうとするが…衝撃波は数が多くそれで威力も鉄巨人のとは桁違いだ…そう簡単に弾けるはずもなく被弾していく……

セフィロス「…楽しめないな…」

鉄巨人は倒れた……ふむ…これでは不完全燃焼だ……と思っていたが……

鉄巨人「……ガアッ！」

私が振り向いた先の目の前に鉄巨人が居た…そして剣を振り下ろす…私は一応飛んで避けたが……

セフィロス「…縮地を使えるか……やるな。」

私は剣を持ち直しよう言う…

セフィロス「第2Rだ。」

鉄巨人「…ガアッ！」

……鉄巨人は剣に力を込めている……私もとりあえず怖い（嘘）から刀を構え防御の

姿勢に入る……

鉄巨人「……ウウウツ！」

鉄巨人が繰り出したのは……プレイヤーか……青い剣気を纏い私に襲い掛かる……

セフィロス「クラウドなら私に傷をつけられる技だが……貴様は所詮偽物だ。」

私は緑のバリアを展開する……そしてプレイヤーが弾かれた鉄巨人は少しよろける

…

セフィロス「閃光」

すかさず突きを一回入れる……要するにガードカウンター技だ。

鉄巨人「……アア！」

私がバリアを解除した瞬間襲い掛かる鉄巨人……しかし突如その動きが止まる……

鉄巨人「グツ……ガツ……アア！」

鉄巨人が苦しみ出した直後……遅れてくる無数の突き……実は閃光というのは1回の突きに見えるようで私は無数の突きを繰り出していたのだ……痛みが遅く伝わるのは鉄巨人の神経が痛みと感じ取るのが遅いからだ。

鉄巨人「ウウ……アア……」

鉄巨人はそのまま倒れる……そして塵となって一つにまとまる……

セフィロス「……やはり召喚石か……」

一つにまとまったものは赤い石になった……私はそれを持ち懐にしまおう……  
セフィロス「……ISなんかじゃ話にはならんな……新たに弟子をとるか……」  
私は戦力の増強の方法を考えながら控え室に戻った……

アリーナ控え室

戦闘も終わり、疲れた体を休めている私に突如後ろから足音が聞こえる。

千冬「セフィロスか」

セフィロス「なんだ、織斑千冬」

千冬「先生を付けろ」

セフィロス「善処する」

私はそう言って愛刀の手入れをする……毎回使うから手入れは欠かさない。

千冬「お前に少し聞きたいことがある……」

セフィロス「……なんだ？」

私は手入れの手を休めず耳だけ傾ける…

千冬「……影月レオンは……何者なんだ……？」

セフィロス「……幼馴染みだ。」

とりあえずこう言っておけば問題は無い……多分な……

千冬「嘘つくな……じゃあ何故生身の体であの巨人を倒せた！」

話が変わったな一気に……

セフィロス「……練習してたら出来た。」

千冬「出来るか普通!？」

いやお前も出来そうだが多分……話を聞けば生身でIS止められるという噂を聞いた事あるし……そう思えば戦乙女と言う渾名も納得するな……

千冬「なんか変な事考えてないか？」

セフィロス「いや……別に考えてない。」

俺はそう言っただけ席を立つ……向かう先は総帥のもとだ。

千冬「どこへ行くんだ……」

セフィロス「……レオンの所さ……」

私はそう言っただけ走って行った……

千冬「……影月……まさか……な……」

## レオンVS化物

レオンside

アリーナ

レオン「ああああああああああああああああああああああ!!やべえやべえ!?!?!」

今俺は炎の化物に炎球を投げられまくりながら逃走している……何故かと言うと……

少し前のアリーナ

鈴「……ありがと……助けてくれて」

レオン「礼なら後でだ、今はそこでくたばって一夏を持つて離脱しろ」

俺は鈴を助けた後、すぐにアリーナの端へと撤退した。

鈴「まさか……あれを止める気？」

そう言った……まあ……確かに普通じゃ無理だ……

レオン「俺らにしか止められないんだよ。あいつらは。」

俺はそう言つて I S を起動せず普通の刀を持って化物を見定める。

鈴「I S 起動しないの!？」

レオン「わざわざ拘束器具を展開するほどハンデは要らんだろう。」

俺は正直 I S を使つてると普段の動きが制限される……普段はアクロバティックな動きで敵を倒してるからな。

鈴「……絶対帰つてきなさいよ!」

レオン「風さんに心配される程ヤワではない!」

俺はそう言つてカツコよく炎の化物に突撃していった……

現在

レオン「やべえやべえ!! キャラが崩壊するほど調子乗りすぎた!？」

俺は全速力でアリーナの周りを飛んだりして炎の球体を避けたりしてるが……数が多い!!

レオン「あーどうしようかな……いや……あれがあったな……使えるかわからんがね!」  
俺はそう言つて後ろを振り向き化物を見据える……刀を突き出し……

レオン「神影殺法・凍」

その刀を思い切り化物に投げる……

化物「グウウ!」

その化物の体がどンドン凍り付く……

レオン「これは刀の刺したところから体が凍っていくと言う面白い殺法さ。あまり暗殺には向いてないけどな。」

て言うかこれ使うなら無名の刀じゃなくてアイスブランド使えばよかったかもな

……

化物「……ギヤアアア!!」

化物はそのまま凍り付いた……呆気ないな……本当に……

セフィロス「……終わったか……」

レオン「ああ、神影殺法使つたら一瞬で終わったわ。」

セフィロス「……まあ、この雑魚相手に舐めプしたお前もお前だ。」

レオン「うっ……」

セフィロス「全く……手加減は油断の元と言っただろ。」

レオン「すみません。」

返す言葉も無いな……すると奥から鬼神……ゲフンゲフン……織斑千冬がこっちに来る。

千冬「おい影月、なんか変な事考えなかつたか？」

レオン「なにも考えてません」

千冬「ならいい……セフィロスと影月は後で職員室の私の所に来るように。」

そう言つて織斑千冬はその場を後にした。

レオン「……面倒だなあ……」

俺はそう言つて化物に刺さつてる刀を抜き校舎に戻つていった……

## 職員室

千冬「何故ここに呼ばれたか分かつてるか？」

唐突に聞いてくる…今俺とセフィロスはさつき言われた通り職員室の織斑千冬の所に来ている……

レオン「……許可無く神影殺法を使ったから？」

千冬「違うわ。」 スパーン

出席簿アタック痛いです。

セフィロス「あの化物の真相を知りたいのか？」

千冬「それもあるが……それより……」

織斑千冬は一呼吸置いてこう言った

千冬「暗殺業界最強の影月家は何故ここに居る？」

あちゃー、その質問来ちゃったか……あまりこれ言いたくないししかもちやつかり影月家ってバレてるし……

レオン「……人に興味を抱くためです。」

千冬「……どういう事だ？」

レオン「……それはまだ言えません。」

これを言うことは心を許すことに繋がる……だからまだ言わない……

千冬「……まあこれ以上は深く言わないでおこう。」

レオン「ありがとうございます。」

良かった……これ以上追求されたら大変だからな。

セフィロス「他に用はあるか？」

千冬「…あの化物達はなんなんだ？」

レオン「野生の動物の変異種です多分」

千冬「即答だなおい!？」

いつものクール千冬じゃないな……まあこれも新鮮か。

千冬「…政府にはそう報告しておく。寮にもどれ。」

レオン「…わかりました。」

俺とセフィロスは職員室を後にした……職員室から出る直前なんか千冬先生の呻き声  
が聞こえた気がするが気のせいだろう。

## 寮の部屋

楯無 side

楯無「…影月家の情報がまるでゼロって所ね…」

私が今調査しているのは影月家の思惑を止めるための情報を集めてる。

しかし…手掛かりすら掴めないとは…完璧詰むわよ…これ。

楯無「流石暗殺界最強の家系ね…セキュリティも完璧ね…」

書類に目を通すがそこに書いてあるのは殺された人の名前と現場しか無い…暗殺した跡も無いし目撃者も居ない…まさに完璧と呼べる暗殺の技ね…

楯無「…フェニックス社にも探りを入れないとダメかしらね…一応影月と言う苗字が入ってるから…ワンチャンあるかも…」

影月レオンの母親が経営しているIS企業の中にもしかしたら…影月家の情報が眠ってるのかもしれない…

楯無「問題は…どう潜入するかよねえ…」

私はそれを考えながら部屋を出た…とりあえず生徒会室になら何かフェニックス社の情報やセキュリティがあるかも知れない…そう思い私は生徒会室に歩いて行った…

## 幕間・自宅帰還

自宅

レオン side

代表戦が終わった後、すぐに週末に入った。俺は普段は寮生活だが、たまには家に帰りたくなるときだつてある。それに、家に帰れば本性も出せるから定期的には帰るのさ。

レオン「ただいまー。」

俺は自宅の玄関を勢いよく開く。すると奥から走る音が聞こえる。

アundaiン「おお！帰ってきたのか！」

出迎え役はアundaiンか。女なのに男っぽいから凄いやな。

レオン「定期的には帰るって言ってるだろ？」

アundaiン「そんな事言ってたか？」

レオン「忘れっぽいなお前さんは……」

俺は玄関から家の中に入る……するとリビングから骨の音が聞こえる……

サンズ「ようレオン、もう退学処分にされたのか？」

レオン「しばくぞちビスケルトン」

サンズ「なら俺と最悪の時間を過ごす事になるぞ？」

レオン「やってやろうか……」

俺はサンズに殺気を少し出す……すると慌てて走って来たもう一人が

パピルス「喧嘩するな二人共！喧嘩するより笑え！ニエーヘツヘツヘ！」

……ああ……なんかそんなふうに言われたら喧嘩は出来ない……

レオン「……落ち着くか……サンズ」

サンズ「……ああ……同意見だ……」

そう言つてリビングに俺達は移動した……四人で肩を組んでな。

リビング

ゲーティア「……なんなのだこいつ！リスクルなんてやりおつて！」

ティアマト「…ゲーティアチームプレイを忘れないでよ…貴方が勝手に死ぬから私がやりにくくなってるのよ…」

…リビングのソファァーに居るのは人王ゲーティアとティアマト…手に持つてるのはスマホ…多分荒野何とかでもしてんじやないのか？

レオン「おいニート共…久しぶりだな。」

ゲーティア「うむ、久方ぶりだな。」

ティアマト「会いたかったわ。」

二人共相変わらずニートしてるな…まあ変な落書き魔法陣から出てきたからやる事も無いのだろうな……ピーストと知ったのはちよつと前だしな。

ゲーティア「昨日例の兎が来てたぞ？」

レオン「…あいつか。」

ティアマト「なんでも最新装備が出来たから評価して欲しいとか。」

俺に評価させるよりガスターの所に行ったほうが…

ゲーティア「お前はあいつの右腕だろ…やってやれ。」

レオン「…こだわる理由が…」

そのまま言うなら…やるしかないか。

東「という訳で私の登場だよ！」

レオン「アイエエ!?」

何も無い空間から現れた!?

東「流石に驚いた? ふふーん!」

胸を張りながら言う……おっぱいが揺れて美味しい……

東「むっ……レオちゃん今なんか変な事考えてたよね?」

レオン「いや、何も……」

さて……そろそろ説明しよう。こいつは篠ノ之東……I Sの開発者だ。俺と出会った時は確か俺がまだ目付きが悪い時か……

過去

ある島の研究所

研究者 A 「やめ、やめろおお!!」

レオン「……せいぜい自分がやった事を悔い改めろ…」

ちつ「……ここには本当にゴミみたいなやつしかいねえ……」

兵士「撃て、撃てえ！」

大量に居る兵士が俺に向かって機関銃を撃つ……

レオン「……後ろだ……」

俺は一瞬で後ろに回る……

兵士「ひつ……うわああ!!」

そして兵士の首を狩る……その数は……50くらいか？返り血に染まる俺の顔や服

……ああ……物凄く美しい……

レオン「……帰るか……」

東「ねえ君！」

帰ろうとした瞬間後ろから声がかかる……

レオン「……誰だ？」

東「私は篠ノ之束！……この研究所を爆破する為に来たよ！」

レオン「……俺はレオン………爆破？」

東「……この研究者……人体実験を平気な顔でしてるんだよ……ISの適合率をもっと高め

る研究の為に平気で……人間を殺す……」

東「…だからこの研究所を爆破する…政府のクソ共の決定でこの研究をした代償だよ…」

レオン「…俺はただ気分転換にクソ共を殺した…」

俺は剣をしまい束を見る…

束「ふふつ…あははははっ!! 凄い面白いね君!」

レオン「ふん…どうだか…」

束「…また会おうね! レオちゃん!」

レオン「ちゃん付け…!?!」

そう言った直後…研究所が爆発し始めた…見たら束が居なくなってる…

レオン「…脱出しよ…」

俺は停めてあるボートに乗り脱出した。

現在

レオン「あの時は荒れてたからな……」

東「殺気がダダ漏れだったよねー」

ゲーティア「昔の方が貫禄があつたな」

ティアマト「でも今の方が話しかけやすいけど……」

救ってもらってからあまりにも出来事が多かったしな……良いことがあつたしその分悪い事もある……

レオン「……さて……東の開発品を見せてくれ！」

東「OKレオちゃん！」

この後俺は東の発明品を評価して夕飯を皆で食べて寮に帰った……楽しかったな……

沖田・巴「連れてって欲しかったな……マスターの家……」

あつ、忘れてた……巴達を呼ぶのを……